

【個人研究】

## エル・システマの研究（下） —刑務所におけるオーケストラ活動の矯正教育的 側面を中心に—

太田 和敬\*

A study of El Sistema (II)

Kazuyuki OTA

El Sistema, or “the system,” is an orchestra movement financially supported by the government of Venezuela. The movement has garnered praise for the education and musical training it provides, and it has also garnered praise for protecting children who live in dangerous areas and for the music education programs it conducts in correctional facilities. The current study evaluates how joining an orchestra and playing classical music corrects the behavior of juvenile delinquents and adult offenders in prison. Findings indicate that rigorous training, cooperation, and responsibility foster self-esteem, teamwork, and social skills. Moreover, public performances and applause from friends and family encourage confidence and pride. These benefits facilitate a subsequent return to and reintegration into the community. These findings suggest that correctional education requires affirming aspects as well as rehabilitative aspects, such as encouraging reflection and/or restitution.

Key words：エル・システマ、オーケストラ、矯正教育、ベネズエラ

### 1 はじめに

クラシック音楽の非行矯正性

私は、年来、クラシック音楽を演奏することは、犯罪抑止効果があるという信念をもっていた<sup>1)</sup>。そう考えた理由は、第一に、クラシック音楽は、決められた楽譜を厳密に演奏するものであり、同じ曲を無数の人が、繰り返し演奏している。わずかなミスも見逃さないような聴衆がいる。従って、非常に高度な自己コントロールが求められる。第二に、演奏する曲は、真の天才たちが作曲したものであり、深い感動が内包されている。この自己コントロール能力と、畏敬の念が、犯罪を

犯さない抑止力となると考えていたのである。実際に、クラシック系の演奏家が犯罪者として報道されることは、極めて少ないが、ポピュラー系の音楽家はドラッグ問題で逮捕されることが、それほど珍しくない。また、犯罪を犯してはならないという意識の高い教師や警官などが犯罪を犯すことは、頻繁に報道されている。

戦前同じ考えで実践している人が存在していた。20世紀の代表的な指揮者であるブルーノ・ワルターが、アメリカのサンフランシスコを訪れたとき、ある合唱指導者が、刑務所で囚人たちに合唱指導をしたところ、囚人たちの人間性が格段に改善され、その合唱に参加した人たちは、出所後、再犯をしなかったと言われたという。ところが、刑務所の方針で、合唱は止めざるをえなくなり、有名なワルターに助力を依頼にきたのだ。合

\* おおた かずゆき 文教大学人間科学部臨床心理学科

唱を実際に聴いたワルターは次のように感想を書いている。

場内が静まり、音楽が始まって、めいめい違った気持ちをいだいているこれらの人々を音楽の世界へと連れてゆく。……すると、舞台から流れ出ている音楽の影響のもとに、硬い顔つきは融けて柔らかく、ずるそうな顔は善良になり、気の抜けた陳腐なのは引き締まって真剣になり、シニカルなのは感動した表情を浮かべてくる。……つまり、どの人も何か深い、そして善いものの作用を受けているのだということを示す一種の表情の変化が現れたのを、たぶん皆様はたは記憶しておられることでしょう<sup>2)</sup>。

ワルターはそうした試みを、ドイツでもやるべきだと主張していた<sup>3)</sup>。

何故音楽にそのような力があるのか、ワルターによれば、その中心は、ハーモニーと調性にある。音楽はいろいろなことを表現するし、不協和音なども使うけれども、最後は協和音となって安定する。不協和音は不安を表すが、協和音となって安心を提示するというわけで、こうした和音の性質が、人々の間の人間的な協和性を促進するとワルターは解釈している<sup>4)</sup>。

しかし、こうした刑務所での音楽的实践は、普及することはなかった。この考えには、明確な難点がある。それは、犯罪や非行を犯す人たちが、もっとも好まない音楽がクラシックだからである。そうした諦めの気持ちになっていたとき、エル・システムを知ったのである。ベネズエラというクラシック音楽で有名な人材を出してきたわけではない国で、当時20万人の子どもたちがオーケストラに参加し、代表メンバーのユース・オーケストラが世界中で高く評価されており、尚且つ、世界で最も危険な国のひとつとされるベネズエラで、子どもたちを犯罪から守っているというのである。「音楽を通して社会を改革する」という理念の実現をめざしており、かなりの成果をあげていた。何故そんなことが可能になったのか、どうしてもそれを探る必要を感じたのである。

非行を更生させるという点は共通しているが、私が考えていたこととエル・システムの理念が全く違うのは、エル・システムはオーケストラ運動

だった点である。世界的にも、クラシック音楽の学習は、楽器をプライベート・レッスンで学び始める。ところが、エル・システムでは、楽譜も読めない段階から、オーケストラに参加し、楽器を扱うことができない幼児はペーパー楽器を使うことまでする。エル・システムがあげた音楽的成果はもちろんのこと、「社会変革」的な意味でも、オーケストラから始めることは本質的な意味をもっていた<sup>5)</sup>。

## 2 課題

最も大きな課題は、何故オーケストラが、子どもたちを危険から守るのか、そして、非行や犯罪の抑止効果になるのかという点であるが、更に、既に犯してしまった人の更生に効果があるかという点も考察する必要がある。

「音楽による社会変革」という言葉は、エル・システムの指導者であるアブレウによって、繰り返し主張されている。広く考えれば、音楽・芸術と社会の関係ということになるだろう。日本で、エル・システムを最も実証的、かつ理論的に考察しているのは、山田真一である<sup>6)</sup>。

山田は序文で3点の問題を設定している。

- 1 芸術は社会に本当に役にたつのか。
- 2 エル・システムは反ネオ・リベラリズム、反グローバリズムの社会政策なのか。
- 3 途上国で本物の芸術が可能か。

「芸術は社会に本当に役に立つのか」という問いは、ふたつの側面がある。第一は、芸術が人々に生きる喜びの糧を与える有用な存在でありうるかという問いである。芸術が多くの人に幸福感を与えてきたことは間違いないから、むしろ、「糧」を与えるような存在感があるかが問われるものだろう。そのことは、第二の、社会的な問題を解決する手段になるかという問いに関わってくる。カウフマンは、エル・システムはベネズエラの未来を変えたと評価している。失業・ドラッグ・暴力・破壊が蔓延する地域において、スクレオに行けば、一日安心して過ごすことができる、そのなかで子どもが健全に育つことは、未来を変えていることになるという評価である<sup>7)</sup>。すべての子どもたち

が参加しているわけではないが、危険な地域で生活している困難な子どもを守ったことは事実であり、エル・システムに來なかつた子どもが刑務所に入ったことも多いとカウフマンは指摘する<sup>8)</sup>。他方、エル・システムが活動を始めてから、既に40年近く経過しているのに、ベネズエラの治安は一向に改善されず、犯罪は国際的にトップを競うほどに多く、刑務所の暴動も近年ですら頻繁に起きている、エル・システムで育つた子どもたちは既に社会の一線で活躍しているのだから、もっと社会が改善されていてもおかしくないはずだという批判もある。

2の課題は、音楽と政治・社会の関係の問題である。

音楽は単なる娯楽でなかつたことは、歴史的に明らかである。頻繁に社会的・政治的動員の手段として用いられてきた。祭典に音楽は不可欠であるし、例えば、ヒトラーのワーグナー音楽の政治利用によって、今でもワーグナー演奏に反感をもつ人たちがいる。

2013年に長年カリスマ的権威をもってベネズエラを統率したチャベス大統領が死去し、後継者として使命されたマドゥロが大統領に当選したが、当初から武力的反政府活動が起こり、都市部での中間層を中心とする反政府運動も起きた。そのなかで政府による抑圧的取り締まりに批判も高まっていた。そうした中で、ドゥダメルに政府批判の言動を求める声があり、ドゥダメルが沈黙したために非難されるという事態が起きた<sup>9)</sup>。エル・システムの事業は、90%以上を政府の支出によっており、その意味で政権に支えられてきた。特にチャベスはエル・システムを多方面に拡大し、積極的に援助してきた。マドゥロの弾圧に対する抗議行動の中で、逆に政治的な追究もなされている。芸術と政治のあり方をどのように考えればよいのかという課題を提起しているといえる。

山田はチャベスが拡大政策をとっていることで、エル・システムが反グローバリズムなのかという問いを提起している。エル・システム自体は、ペレス政権のときに始まったもので、当初は新自由主義的な政策の下で、政府の援助を受けてきたのだから、エル・システム自体が反新自由主義と

はいいがたい。しかし、エル・システムが取り組んでいる貧困対策は、その貧困や格差を生んだ新自由主義、グローバリズムに対する批判を内包している運動という側面がある。他方、機会の開放、上級オーケストラに進む際の競争的要素、国際的活動という点では、新自由主義やグローバリズムに合致する。

3の課題もいくつかの側面がある。

山田の意図は、ブルデューの検討である。ブルデューは、芸術の水準は社会発展の度合いと関連しているという見方を支持している。それに対して山田は、エル・システムは、文化的伝統や親子間の文化資本の受け渡しなどいらないことを示しているとする。

ブルデューは以下のように書いている。

一定の社会組織において、そこに展開される種々の教育的働きかけは、支配的教育的働きかけをこうむっている教育的働きかけのシステムへの所属と無関係には決して規定されえないもので、当の社会組織に特徴的な文化的恣意の体系を再生産する傾向がある。すなわち、支配的な文化的恣意の支配を再生産する傾向がある。そうすることで、この文化的恣意を支配的位置におくような力関係の再生産に寄与するのである<sup>10)</sup>。

つまり、経済的・文化的な貧困層は、貧困層の文化を再生産しているものであり、高度な芸術を高い水準で修得するのは困難ではないかという課題として、ブルデューを引き取り、その検討を山田は設定しているのである<sup>11)</sup>。

これは、クラシック音楽の階級性と普遍性の問題として考察する必要がある<sup>12)</sup>。

世界中に多様に存在する音楽の中で、グローバル化したものは、近代西洋で発達したいわゆるクラシック音楽であり、ある程度国際的に広まっている他の音楽ジャンルも、クラシック音楽のツールを使用している。その普遍性を獲得したのは、合理的な記譜法、音の絶対的な高さを周波数で規定したこと、そして平均律であると考えておく<sup>13)</sup>。この普遍性により、それまでクラシック音楽の後進地域だったベネズエラで、全国の子どもたちが高度な技術を獲得し、それを集約した上級

オーケストラが国際舞台で活躍することができたといえる。

クラシック音楽の階級性はどうか。クラシック音楽は、本当に上流階級の音楽なのだろうか。ハイドン時代までの有名な作曲家は、王侯貴族に仕え、その生活に必要な音楽を作曲し、演奏するのが役割だった。オペラなどは公開の演奏が行なわれていたが、観客はブルジョア層であって、貧しい農民が日常的に楽しむものではなかった。そして、ハイドンが仕えていたハンガリー貴族、エステル・ハージー家に仕える使用人の中で、ハイドンの地位は決して、上位ではなく、料理人より低かったと言われている。ベートーヴェンは何人もの貴族の女性と恋愛関係になったが、身分のため、結婚は決して許されなかった。完全に著作権が確立して、音楽家の経済的状況がよくなる以前において、音楽家は、貴族のお抱えになる以外には、貧しかったし、職人階層と考えられていた。鑑賞者（消費者）は上流階級でも、音楽家は中流階級だったのである<sup>14)</sup>。現在でも、ヨーロッパの音楽会では、正装でないと入れないと思われている一面もある。そうした階級の色彩は、薄れているとしても、クラシック音楽が、「大衆音楽」ではないと思われている所以だろう。

その理由はなんだろうか。

- 1 修得のために多くの時間と費用がかかること。  
クラシックの音楽家は、楽器の修得や作曲を学ぶには多くの時間がかかり、また、楽器や教師の謝礼など、多額の費用がかかるために、音楽と無縁な貧しい家庭の出身者は、ほとんどいなかったし、現代でも、それは同様である。
  - 2 もともと貴族社会で奏でられていた音楽であったこと。クラシック音楽の中では大衆的な性格をもつオペラでも、その劇場の前進は宮廷劇場であり、ある意味権力の象徴的な意味をもたせられていた。
  - 3 音楽が厳密に記譜され、和声法や対位法などの理論的な裏付けをもち、高度な知識を前提とするようにつくられており、鑑賞にも「知識」が必要と思われていること。
- 以上のようなことは、クラシック音楽以外の

ジャンルでは、あまりみられない。

それを象徴的に表すのが、アメリカにおける音楽家の民族構成である。

E. Tammy Kimの‘Rocking the symphony – Young black musicians change the face of classical music’は、アメリカで唯一黒人とラテンアメリカ人に開かれたジュニアのコンクールに出場した黒人を扱ったドキュメントであるが、アメリカにおけるクラシック音楽界の民族的閉鎖性を指摘している。Kimによると、アメリカのオーケストラは、極度な白人社会で、アジア人は増えているが、黒人とラテン系は4%のみであるという。1842年に設立されたウィーンフィルが、初めて女性を採用したのは、1997年で、今でも唯一のマイノリティは、ヨーロッパ生まれのアジア人である<sup>15)</sup>。

ベース奏者のRichard Davisは今80代で、ウィスコンシン大学の教授だが、10代のときに、唯一のアフロアメリカンとしてシカゴシビックオーケストラの奏者となり、その後ニューヨークにいて、様々な音楽家と活動したが、世間はジャズ奏者とみている。いつも「君は黒人だ、ジャズをやらなくちゃいけない」と言われていたそうだ。「しかし、ジャズとクラシックはひとつであって、同じものだ。分けるのは間違っている」とDavisは言っている。

1947年に、バーンスタインが、黒人音楽の壁について書いているが、彼は、黒人音楽家がメジャーオーケストラで採用されず、黒人音楽家はジャズに行かざるをえないと指摘していた。20年後、ニューヨーク・フィルが黒人バイオリン奏者Sanford Allenを採用したが、そのとき採用されなかったArthur Davisが人種差別で訴えている。その訴訟がきっかけで、1970年から、目隠しオーディションを実施しているが、現在フルタイムの黒人奏者はいない。目隠しオーディションは、女性とアジアに非常に有利な結果をもたらし、現在50%は女性になっている。しかし、黒人とラテンアメリカは、ほとんど影響がなく、アフターマティブ・アクションの要求もなされている。

Kimは、このコンクールに残っている黒人のエリオット少年の生い立ちや、母親が苦労してバイオリンを学んだ経緯を紹介しているが、黒人の

オーケストラ団員は国際的にも少ないことを指摘している<sup>16)</sup>。アブレウがエル・システムを始めたのは、オーケストラ団員が欧米人に独占されている状況を打破し、ベネズエラ人によるオーケストラを結成することだったから、民族や階級的閉鎖性の打破は、当初からの目的であった。

### 3 ベネズエラについて

ベネズエラは日本にとって、地理的にも、経済的にも、また文化的にも遠い国である。その歴史はほとんど知られていない。ここではごく簡単に整理しておきたい。

ベネズエラは、正式名称をベネズエラ・ボリバル共和国といい、ボリバルは、南米の独立戦争の英雄シモン・ボリバルに由来する。これは、エル・システムの主要なオーケストラであるシモン・ボリバル交響楽団でも使われている。南米大陸の北部に位置し、面積は、日本の2.4倍、人口は、5分の1である。他の南米諸国と同様、スペインとポルトガルの植民地進出によって形成されたスペインの植民地であった。現在の首都であるカラカスが建設されたのは、1567年で、アメリカ合衆国やフランス革命の影響で18世紀後半から、南米各地で、次第にスペインへの反抗が始まり、1811年に第一次ベネズエラ共和国が成立した。その後紆余曲折を経るが、独立戦争の英雄シモン・ボリバルの指導によって、1821年グラン・コロンビアが成立した。その名の通り、コロンビア、エクアドル、ヌエバ・グラナダ、ベネズエラがひとつの国家を形成していた。しかし、1830年分裂したあと、ベネズエラとしての歩みを始める。その後20世紀前半期までは、安定的な期間はあったとしても、ほとんどが独裁政治によって治められることになる。

コーヒーとカカオのモノカルチャーの輸出構造であったが、1914年にマライボ油田が発見されて以降、ベネズエラは代表的な石油輸出国であり続けている。途上国の例に漏れず、石油産業は外国資本に占められており、現地資本と外国資本の関係、後年の国有化のあり方と、石油による利益の分配の問題等によって、ベネズエラの政治は独裁

と民主主義的要求との間で、大きな揺れを示してきた。

簡単にベネズエラの現在の政治経済状況を纏めると以下のようなになるだろう。

石油という重要な天然資源を有しているために、国家全体の経済は豊かであったが、1980年代から90年代にかけての新自由主義的な政策によって、貧富の差が拡大している。民主主義的な要求と独裁政治が併存してきたことと関連して、ポピュリズムが顕著な政治的傾向が続いている。アメリカとの対決姿勢で有名だったチャベスはその代表であろう。

ベネズエラ社会とエル・システムを考察する上で、最も重要なことは犯罪の問題である。

「在ベネズエラ日本国大使館」が公表する海外安全対策情報には、次のように書かれている。

- (1) 当国では、2014年2月12日の「青年日」以降、全国（特にカラカス首都区、タチラ州、メリダ州、ララ州、カラボボ州、スリア州、アラグア州、ボリバル州、ヌエバ・エスパルタ州等）において、反政府支持勢力と治安部隊及び政府支持勢力との衝突や道路封鎖が起こっており、多数の死傷者や逮捕者が出た。（略）
- (2) 犯罪統計によれば、総犯罪発生件数やほとんどの主要犯罪発生件数には減少傾向は見られず、依然として高い発生率であり、特に銃器を使用した凶悪事件（殺人、誘拐及び強盗）には注意を要する。

（一般・凶悪犯罪の傾向）

- (2) 以下のとおり、カラカス首都区においては、昼夜を問わずあらゆる地域において、殺人事件が発生している。また、ここ数カ月は、生活必需品（牛乳、小麦粉、食用油等）や輸入品（携帯電話、自動車部品等）の物不足が顕著になっており、これらを狙った強盗盗事件や略奪行為が増加傾向になる。特に、バイクに乗った強盗犯人が、路上で被害者に拳銃を突きつけて、現金や形態（ママ）電話を強奪するという手口がおおい<sup>17)</sup>。

ICPO（国際刑事警察機構）の調査によると、2002年人口10万人あたりの殺人件数は、日本で

1.10であるのに対して、ベネズエラ（2000年）では、33.20である。南米は高い国が多く、コロンビア、69.98（2000年）、ホンジュラス（1998年）154.01となっている<sup>18)</sup>。

チャベス政権の評価は分かれる。主に階級的な差といえるだろう。チャベスの死後、遺体対面に数キロの列ができたと紹介したあとに、当時の朝日新聞は次のように、双方の見解を紹介している。

カラカス中心部の貧困層が多いサンアグスティン地区に住むパンテさん（63）は「悲しい。でも、チャベス氏は多くのものを残してくれた」と話した。パンテさんは、貧困などで中等教育を終えられなかった人向けの教育プログラムで毎晩、数学や歴史を学ぶ。「知らない国を知る地理が楽しい」という。読み書きができない55歳以上の国民は、チャベス氏就任後の約10年間で7%減った。世界銀行によると貧困率は50%から33%に減った。

逆の評価も聞かえる。ある会社経営者は「貧困層や周辺国の支援ばかりで国内投資が減り経済が停滞した」と嘆く。2005年に日量327万バレルだった石油産出量は11年時点で299万バレルに減少。インフレ率は30%近くで高止まりしている。（カラカス）<sup>19)</sup>

ベネズエラで、スポーツは、他の国よりは盛んではないようだ。戦後のオリンピックで獲得したメダルは、夏季で合計12、冬季はまだない。ソチオリンピックの代表は一人であり、しかも、43歳の女性だった。サッカーは、南米で唯一ワールドカップ本大会に出場経験のない最弱チームとされている。盛んなスポーツは野球で、アメリカ大リーグに多数の選手を送り出している。つまり、スポーツの世界で国際的な活躍をしようという雰囲気は、他の南米諸国に比較して弱いと考えられる。日本で少年の非行が大きな問題を考えられた時期に、学校では、非行対策としてスポーツ系の部活を重視し、スポーツで疲れさせれば非行に走る余裕がないという意識が、学校の中にあった。こうした雰囲気はベネズエラにはなく、非行対策が、スポーツではなく、文化に向かう余地が大きかったと考えられる。

## 4 エル・システムの概略

エル・システムは、いまでも指導者であるアブレウが、1975年、ベネズエラ的首都カラカスのグレードで始めたオーケストラの運動である。当初11名で始めたが、すぐに多くを集め、1年後の1976年には、スコットランドで開催されたユースオーケストラの国際大会international Festival of Youth Orchestraでグランプリを獲得し、一躍国内で認められることになった。その後、アブレウは文化大臣に就任することで、多くの人脈も駆使し、現在では、全国で300のオーケストラ、40万人近くの子どもが参加する一大運動になっているだけではなく、国際的にも広がっている。日本でも、広島、相馬、京都などにエルシマにならった子どもオーケストラの活動がある。

ベネズエラのエル・システムの特徴は以下のとおりである。

- 1 希望する者は、誰でも参加でき、無料で指導を受けることができ、楽器も無料で貸与される。
- 2 ベネズエラ各地に子どもオーケストラの拠点（ヌクレオと呼ぶ）が作られ、更に代表的な拠点に、段階的に上級のオーケストラが設置される。上級のオーケストラに参加したい者はオーディションを受けて合格すれば、参加できる。遠くのオーケストラに通う場合には、交通費の援助がでる。
- 3 専任の指導者がいるが、上級のオーケストラメンバーが下級のオーケストラの指導をする。相互に教えあうことが、エル・システムの大きな特徴である。
- 4 最も上級の全国的なオーケストラ（かつてはひとつだったが、現在では複数存在する）は、頻繁に演奏会を開き、外国の演奏旅行もあるので、プロに近い活動をしており、生活を保障するための経済的保障がある。
- 5 活動は当初から集団的な演奏形態に参加することになるが、非常に小さな子どもは、最初に、歌、ソルフェージュから入り、いくつかのオーケストラでは、紙で作られた楽器で、もち方

や扱いかたの基本を学んでから、実際の楽器に触れる。

## 5 社会問題とエル・システム

エル・システムは、「音楽を通してベネズエラを変え、世界を変えている」と賞賛されるが、それは社会問題を音楽が改善しているという認識を示している。そういう意味で、エル・システムが世界の社会問題を改善していると、本当にいえることができるかは、多くの人が疑問を感じるに違いないが、ベネズエラでは、エル・システムの高い社会的評価が、犯罪の多いベネズエラ社会を改善している点に因っていることは間違いない。

ベネズエラには、失業、ドラッグ、暴力が蔓延し、ヌクレオに行けば、一日中安全に過ごせるし、また家族も安心できる。少なくともエル・システムに参加している子どもたちは、ベネズエラの犯罪から守られて、健全に成長しているから、未来にとって有用な条件をつくり出していることは間違いない。アブレウは、犯罪に近接している中では、価値の意識が大切であり、そのための錨が必要であると主張し、「貧しいものための文化は、貧しい文化であってはならない」との原則の実現のために政府に働きかけて、当時の大統領ペレスの支持を得て、必要な予算を獲得していった<sup>20)</sup>。その膨大なエル・システムのための予算は、文化予算ではなく、青少年対策の福祉予算であることが、社会の認識を表現しているのである。もともとはベネズエラ人によるオーケストラを設立することが目的であったアブレウの活動が、どのようにして、社会問題の改善に展開していったのか、そしてその到達点としての刑務所におけるエル・システムの活動を紹介し、その意味を考察してみよう<sup>21)</sup>。

### 5-1 すべてに開く

アブレウが、最初にベネズエラ人によるオーケストラを発足させるために呼びかけた相手は、音楽大学で学ぶ学生や、既に楽器を修得しているが活動の場のない若い人たちであり、当初集まって活動をはじめたのは、もちろんそうした若い音楽

家の卵だった。しかし、アブレウは当初から「来る者は拒まず」の原則を厳守した。必ずしも当初の参加者の賛同を得ていたわけではないが、アブレウはそれを固守した。アブレウが少年時代にピアノを習ったシスターのマルタの影響であると考えられる。彼女は豊かではなかったが、生徒は更に貧しかった。そして、安い謝礼で教え、払えない者には無償で教えていた<sup>22)</sup>。

こうしたアブレウ自身の成長の体験から、貧しい者が参加できるように、すべて無償とする方針を当初から堅持し、早くも75年の夏には、ユースオーケストラの社会プロジェクトを始めることになる。しかし、はじめは反対が強かった。音楽と社会変革の目的は異なり、音楽的成果をあげるには、誰でも受け入れるのではなく、適切な選抜が必要であるという反対だったと思われる<sup>23)</sup>。しかし、アブレウの考えは、「音楽は芸術であるのみならず、人間形成なのだ」という信条であり、音楽の技術的向上と人間形成を不可分のものとしていたのである<sup>24)</sup>。アブレウやサウセ<sup>25)</sup>など、活動を始めたひとたちは、多くがベネズエラの振興を重視する立場であったから、「文化の発展というより、社会の発展なのだ。国家の安定に寄与する」という主張をもって、政治家に財政的支持を訴えることに活路を見いだした。そして、反対意見にあわせていたら、ベネズエラ社会変革のチャンスがなくなってしまうだろうとカウフマンは評価している。当時は石油収入がたくさんあったときで、時期的によかった。

1975年、アブレウがエル・システムを前進させた時代は、上記の如く石油収入が拡大し、社会全体が文化的要求を高め、求めていた時代だった。アブレウの活動だけが当時開始されたわけではなく、テレサ・カレーニョ劇場の建設に象徴されるように、たくさんの文化団体が活動を開始している。音楽大学に付属する形ではあるが、青少年のオーケストラも実際に活動していた。そうした中で、アブレウのランダエタ・ユース・オーケストラが演奏会を開き、翌年テレサ・カレーニョ劇場のオープニングコンサートの主体となったこともきっかけとなり、ベネズエラの地方でユース・オーケストラを設立する動きが活発になった。し

かし、山田が指摘しているように、地方の組織は当初は順調に活動ができたわけではないようだ<sup>26)</sup>。

ヨーロッパから帰国すると、アブレウは、成果の報告を武器に、ベネズエラの全国的な音楽学校の建設のための資金を、政府から引き出すための働きかけをした。あらゆる話し合いをして、どのくらいの費用がかかるか、計算し、他方、アルコール、ドラッグ、貧困、暴力などによる問題解決のための費用と比較検討した。社会の事実を知る政治家で、アブレウに反対する人はほとんどいなかった。当時の経済状況からみて、援助の可能性があると思われた。彼の粘り強さ、議論の事実に基づいている点、人脈、敵意のない柔らかな魅力などが、目的の遂行にプラスとなり、夢の実現にむけて踏み出すことに成功した。ベネズエラ政府に対して、社会、健康の改善を促進するべく、全国にユースオーケストラを建設し、貧しいものための音楽学校をつくることを認めさせたのである<sup>27)</sup>。

1977年6月15日に、最初のヌクレオがYaracuyに、8月2日にGuayanaに二番目のヌクレオが設置される<sup>28)</sup>。そして、全国的なネットワークが形成されていくのである。

では、ヌクレオのもつ意味はなんだろうか。

アブレウの設立したランダエタ・ユース・オーケストラは、首都カラカスを拠点としていたが、それでは地方の子どもたちは、参加することができない。全国的に、文字通り「誰でも参加できる」ためには、地域にオーケストラ活動をする場が必要であり、それを実現するために設置されたのがヌクレオである。núcleoとは「中核」「土台」という意味であるが、地域のオーケストラ活動の拠点である。数が多くなればなるほど、参加しやすくなる。

現在ではほぼ全国的に存在しており、申込書に記入して提出すれば、誰でもオーケストラにはいることができ、選抜は一切ない。現在285のヌクレオがある<sup>29)</sup>。

参加数はヌクレオによって多様であり、数百から数千の規模までである。大きなところでは、複数のオーケストラが活動している。数千の人がいれ

ば、技術水準の段階によって編成する。

参加者には費用もかからない。

エル・システムのホームページのfaqで次のように説明されている。

経済的に無理なときに、楽器をどのように学ぶことができるのですか。

楽器を学ぶために、事前の知識やトレーニングは必要なく、エル・システムではすべてが無料です。学生やオーケストラの構成員は、教師の推薦によって選択された楽器を始めます。コンサートで弾いたり、グループや個人で練習すること、また学ぶために場所を利用することが可能です。子どもの身体的、音楽的発達によって、楽器を適切に調整することは、使用契約によって行ないます<sup>30)</sup>。

一般的にエル・システムというと、ドゥダメルが指揮するシモン・ボリバル・ユース・オーケストラをイメージするが、それは頂点の組織であって、エル・システムの活動は、ヌクレオで日常的に行なわれているものが基本である。子どもたちは、ヌクレオに毎日通い、毎日4時間程度の練習をこなし、演奏会を開催する。才能や意欲の高い子どもは、上級のオーケストラのオーディションを受けて移動していくが、そうでない子どもたちも、練習や公演を通して、音楽する喜び、チームワークの大切さ、責任感などを学んでいくのである。アブレウが強調する徳育の側面もめざされている。

そして、エル・システムの活動に参加するには、親の協力が不可欠とされ、送迎や練習の協力、公演を聴くことなどを要請される。そのことによって、家族の結びつきを促進することも意図されている。エル・システムのホームページで次のように書かれている。

音楽的意欲のなかでの発達に加えて、教授-学習過程が、誕生から成人まで、長所の統合的発達を構築し、そして責任感、しつけ、義務、労働、所属の感情のなかで、チーム、尊敬、便利、協力を形成し、家族や共同体のなかにおけるすべての価値の多様な市民を形成する<sup>31)</sup>。

## 5-2 危険地域にヌクレオ

エル・システムに対して、政府が多額の公費を支出しているのは、音楽的成功よりは、子どもの安全を守ることで、社会的不安を軽減させることが目的であることは、再三述べた。子どもを音楽教室に留まらせることによる、犯罪からの防衛は、確実に効果をあげているといえるだろう。子どもが小さい場合、送り迎えは親がすることが参加の条件になっており、音楽活動は建物の中で行なっている。

エル・システムは、アブレウによれば、当初から社会改良的目的をもっていった。カラカスは世界で最も危険な都市のひとつとされ、犯罪が日常茶飯事であり、道を歩いているだけで、流れ弾にあたり、あるいは誘拐の対象となったりすることもある。町を歩いていけば、いつでも犯罪に巻き込まれたり、あるいは犯罪組織に入れられる危険もある<sup>32)</sup>。そうした中で、エル・システムに通っていれば、放課後のほとんどを過ごすことになり、危険から隔離されるため、多くの親が、子どもの安全のためにエル・システムにいれるようになった<sup>33)</sup>。送り迎えなどの手間があり、協力が要請されるが、子どもが犯罪に巻き込まれることを考えれば、小さな労力であろう。こうした予防的な取り組みとしては、エル・システムはほとんど完全に目的を達成しているといえる。

しかし、実際に犯罪を犯したり、あるいは非行に走った者が、エル・システムに参加することによって、更生できるかは、また別の問題である。この対策はふたつある。

第一に、特別に顕著な貧困地帯や、安全が脅かされている地域に、ヌクレオを設置して、エル・システム活動を導入している点である。社会的認知度が低い時期には、ヌクレオを設置することは、地域からなかなか同意をえられなかったというが、エル・システムが国際的にも注目されるにしたがって、ヌクレオを設置してほしいという要望が逆に寄せられるようになり、更に、危険な地域での要請が強いという。

危険が大きい地域にヌクレオを設置する方針を、アブレウは意図的にとっていくことになる。「エル・システム」というビデオには、大きなゴ

ミ捨て場のある町に設置されたヌクレオの様子とその周辺が描かれている。ゴミ捨て場には、ゴミを拾うひとたちが、売れそうなゴミを見つけ、持ち出すのだが、その中には子どももいる。アブレウは、そういう地域こそヌクレオが必要であると言う。しかし、その地域ではまだ出発したばかりだからだろうか、日常歌われている歌を合唱する姿があった。まだまだ統率がとれているとはいえず、子どもたちは練習に身の入らない者もいる。そのような環境から出発するヌクレオもたくさんあるだろう。

1978年6月に、危険な地域であるMonagasにヌクレオが開校された。370人の子どもほとんどが、社会的に困難な子どもであり、アブレウの主張で実現したものだが、以前は考えられないことだった<sup>34)</sup>。

次のように紹介されている地域のヌクレオがある。

典型的なエル・システムの音楽学校は、Montalban音楽学校である。スラム地区にあり、カラフルで、塀に囲まれている。2歳になれば、歓迎され、無料で楽器を貸与される。そして、必要な社会的援助をうけることができる。我々が訪れたとき、アジアとヨーロッパの融合的な音楽が聴かれた。コダイ法、ズスキメソッド、そして、ソルフェージュだ。歌とダンスをとり入れ、子どもたちは、聴衆の前で、タラップを踏む。調子をとれるようになると、レッスンを始める。多くの大人が教え、個人的なレッスンが行なわれる。愛と信頼と自信がある。個人的な創造性に基礎をおいている<sup>35)</sup>。

カウフマンは、カラカスの端にあるSarriaのヌクレオを指導しているトランペットのRafael Elsterの様子を紹介している。彼は同僚と一緒に1000人の子どもの指導をしており、ヌクレオの音楽学校に行くが、そこには、廊下も、中庭も、催事用緑地も、木も、小屋もないようなところで、午後は、子どもの合唱、ホルンセッション、弦楽器、打楽器グループ、そしてオーケストラの練習を見る。休みもなく、指導しているが、他の面倒を教師が見ているときに、子どもたちは指導者もなく、パート練習をするといっている<sup>36)</sup>。

ドイツ人であるカウフマンは、教師たちの労働のすさまじさに驚いている。こうした献身的な指導者たちの努力で、ヌクレオは成り立っているのである。

危険な地域は、同時に貧しい地域であるから、中間層が通うヌクレオとは異なる特別な配慮が必要である。子どもたちが食事すらできない環境であれば、食事を出すヌクレオもある。「お腹がぐうぐういっていたら、音楽などできない」というアブレウの主張に基づいているが、むしろ、破壊、アルコール中毒、麻薬、失業が蔓延している環境から、できるだけ長時間引き離す意味もあるかも知れない<sup>37)</sup>。

アブレウは、TED Prizeの表彰式における挨拶で次のようにのべている<sup>38)</sup>。

カルカッタのマザー・テレサが私を常に印象づける言葉を主張しています：「貧困の最も悲惨で悲劇的な点は、食べ物や住むところがないことではなく、自分が何者でもないこと、誰でもないこと、アイデンティティの喪失、公的な尊厳がないことである」と。だからこそ、子どもが、オーケストラや合唱団で育つことが、高潔なアイデンティティをその子にもたらし、そして家族やコミュニティでのロールモデルとなるのです。その子は、学校ではより良い生徒になります。なぜならその子の中には、責任感や忍耐、そして几帳面さなど、学校で役に立つものが生まれるからです<sup>39)</sup>。

危険な地域での活動は特に大きな費用がかかるが、その費用対効果については、どのように考えられているのだろうか。ニコラス・ピローは、次のように書いている。

IDB (米州開発銀行Inter-American Development Bank)によると、社会的不安の低下によって、投資1ドルは1.65ドルになってかえってきている。2007年で、エル・システムに対する投資による効果は、1億5百万ドルであった。社会的費用の低下は、犯罪率の低下や学校のドロップアウトの減少によって生まれている。

個人にとっては、学校の成績の上昇、精神的発達、共同体にとっては、個人行動の改善として現れている。通学率では、エル・システム参

加者は、95.5%、不参加者は87.6%であり、ドロップアウトは、参加者6.9%、不参加者26.4%である。

成績を見ると、参加者の63%は優秀、不参加者は50%となっている。学校での問題行動をもっている子どもの割合は、参加者12.4% 不参加者22.5%である。

親の育児や社会活動上の改善もある。

地域の共同活動への参加は、参加家族が60.1%、不参加家族37.9%である。フォーマルエコノミーへの関与も、参加者40.7%、不参加者12.5%であり、高等教育進学率も参加者の方が高い<sup>40)</sup>。

少年院や刑務所のあるロス・チョロスLos Chorrosという地域でも、暴力が減少し、オーケストラ活動での暴力もほとんどなくなったといわれている。更に、危険な地域にヌクレオを置いた効果として、国民的融合を促進しているという側面がある。首都カラカスの写真を見ると一目瞭然だが、バリオと呼ばれる貧困層の住宅の地域と、中間層や富裕なひとたちが住む地域は、歴然と分かれている。



カラカスの二重構造の風景<sup>41)</sup>

したがって、地域の学校に通えば、共通の学校生活を送ることはないし、まして一緒に遊ぶことなど皆無である。両階層は交わることがなかったのである。しかし、エル・システムは、多くの子どもたちが、初級のオーケストラから次第に上級のオーケストラに移っていく。初級は地域のヌクレオであるが、上級は拡大された地域で、ここで両階層の子どもたちがともに活動する場が生じるこ

となる。そこで相互の理解が進むことが多いのである<sup>42)</sup>。

こうした環境で育った何人かを紹介しよう。

バスーンのEdgar Monroy 22歳は、カラカスのバリオに、両親、妹、あかんぼうの姪と共に暮らしている。練習が遅くなると、帰りが危険なので、よく泊まる。バスーンを選択したのは、それだけ空きだったからで、お金がなかったのも、プライベートレッスンなどはありえず、オーケストラの練習で頑張った。エル・システムなどせせら笑っている友人が2、3人いるが、ドラッグをしたり、犯罪を犯している。盗まれるから、楽器をもって帰ることはないという。

ロス・チョロスの10代の多くの少年は、逃亡したり虐待したための保護施設にいる。Vulliamyによると、ロス・チョロスは、逮捕されたストリート・チルドレンのための矯正施設であった雰囲気や漂わせている。多くの建物の窓には、鉄骨がある。

Angel Linarezは、音楽家として訓練され、エル・システムで働くようになる前は、車泥棒だったと説明した。しかし、今は彼らが10年前に浮浪者だったとき教えた若者たちを歓迎している<sup>43)</sup>。

次はMiguel Ninoチェリストである。

6歳のときに、父親の体罰のため家から逃げた。カラカスにきて、ストリートチルドレンになり、警察に捕まって、少年保護センターにきた。オーケストラに、何か違うものを感じた。今ではプロの音楽家になり、家庭をもっている。音楽を見いださなかったら、また路上生活になり、ドラッグをしただろうと回想している。

ロス・チョロスの指導者であるPatricia Gujavreはバリオに兄弟と住んでいる。父親は本当の家族ではなく、母親は昨年エクアドルに行ってしまった。バイオリンを始めなかったら、普通の17歳の少女のように、ギャングと生活して、妊娠していただろう。子どもが生まれても、どうやって育てるのかわからない。しかし、音楽が私を鍛えてくれたと述べている。

Wilfridoの父は、アル中で、兄は、学校ドロップアウトだった。しかし、彼が楽器を始めると、父はアルコールをやめ、兄は学校にもどったとい

う<sup>44)</sup>。

エル・システムの参加する子どもを支えるため、問題を抱えていた家族も立ち直る例である。

### 5-3 少年保護センターでのエル・システム

単に子どもの安全を守るだけではなく、非行や犯罪に陥った子どもを更生させるエル・システムの活動を次に検討しよう。

少年保護施設は、19世紀から存在したが、しっかりした建物や専門的訓練を受けた職員がいたわけではなく、少年の更生に役立つものではなかったようだ。1978年に法制定されて、「少年保護センターInstituto Nacional del Menor」<sup>45)</sup>は、盗みなどの軽い犯罪やストリート・チルドレン、虐待を受けた子どもなどを収容する短期の施設で、刑務所のような暴力がほとんどなく、子どもたちには比較的安心な場所であった。カラカスのロス・チョロスの少年保護センターを研究のために訪れたPatricia C. Marquezは、当初許可されず、子どものプライバシーを守る必要と言われたが、職員のプライバシーを守るためのような気がしたと書いている。それに象徴されるように、心理学者、ソーシャル・ワーカー、カウンセラーなどが置かれていたが、子どもたちの人間性を尊重するような印象ではなく、子どもが暴行を受けることもあったと報告している<sup>46)</sup>。

タンストールによれば、この地域の周辺の居住区が政府の方針で市の中心部に移転し、残された施設に、アブレウが1997年にスクレオを設置した<sup>47)</sup>。文字通り、ほぼ全員が何らかの問題をかかえた子どもたちだった。Shiriley Apthorpは次のように書いている。

若い犯罪者、ストリートチルドレン、被虐待児などにとって、Los Chorrosもカラカスの重要なエル・システムのセンターである。22人の教師が週6日、80人の子どもたちのために働いている。Lennar Acostaは、15歳のときに、盗みやドラッグで9回もつかまった。プロジェクトでクラリネットを吹いている。そして、ナショナルオーケストラで演奏し、子どもたちに教えている。Carrenoは「やさしい仕事ではない」と認めている。泣いて指導できないことも

ある。また、親がしかることもある。コンサートを毎回聴いているが、音楽が彼等をリハビリしている。

ストリートで生活していた子どもたちの学びは速い。彼等は栄養が不足しているので小さいが、バイオリンをもたせると、驚くほど早く進歩する。

このような話はたくさんある。

サイモン・ラトルは、この現象は、クラシック音楽の歴史の中でもっとも驚くべきことである。と述べている<sup>48)</sup>。

ロス・チョロス地域のスクレオは、900人の子どもたちが学んでおり、70%は好ましくない環境からきていて、カラカスの近隣、この市の最も抑圧された地域Petareに住んでいる。

様々な本に紹介されているが、エル・システマで更生した典型的な人物で、現在ロス・チョロス地域のスクレオの統括指導者であるレナル・アコスタ (Lenner José Acosta Ramírez) を通して見ておこう。

アコスタは、スクレオの改善のために、110名の教師をコーディネートしている。「音楽が私を救った」というのが、彼のモットーである<sup>49)</sup>。



新しい楽器を受け取って喜ぶロス・チョロス・ユース・オーケストラのメンバー<sup>50)</sup>

アコスタは、1982年2月19日にカラカスで誕生し、子ども時代Carapitaで過ごしたが、母親は離婚と再婚を繰り返し、頻繁に引っ越していたので、小さい子ども時代のことはよく覚えていないという。小学生のとき、午後マーケットで働き始め、ソフトドリンク、靴、服を売っていた。母は一日働いていたので、彼が売っていることを知らない

ほど放任されていた。やがて、9歳でたばこ、12歳のときに、ドラッグをやった。最初マリファナ、それからコカインだった。家族を傷つけたくなかったので、家を出た。次第にドラッグで攻撃的な人間になってしまったという。

El ChimborazoのPinto Salinasというバリオの汚い地域で、盗み、シャドービジネスで、500ドルはいつももっていたという。13歳でピストルをもった。ある日警官がきて、ピストルを川に投げ捨てたときに、捕まった。15歳だったが、「12歳なので、少年保護センターにつれていかれるべきだ」と主張し、ロス・チョロスの少年保護センターに入れられた。台所手伝いをあてがわれたが、年長者としてしかられることが多かったので逃走し、再び以前のような生活に戻ったが、再度の逮捕で、保護センターに舞い戻った。今度こそまっすぐにいきようと思ったときに、オーケストラがロス・チョロスにやってきた。エル・システマが少年保護センター内にスクレオを設置したのである。アコスタは、退屈していて、何かやりたかったし、音楽が好きだったので、参加することにした。トランペットをやりたかったが、唯一残ったクラリネットを割り当てられ、その魅力にとりつかれて懸命に練習し、人間的に立ち直っていく。教師たちの人間性にも共感したようだ。

17歳のときに、センターを出て、高校に入り、音楽を続けた。音楽で生きる意味を見いだした彼は、従来なら、そのまま落ちてしまうとき、踏みとどまれる力を身につけていた。

アコスタは、次のように回想している。

私のクラリネットは、私にとってすべてだ。もし誰かが、私の楽器をとりあげようとしたら、私は攻撃的になってしまうだろう。この楽器は、私の17歳の誕生日のプレゼントだった。私の得た最大の贈り物だ。以前は、自転車やおもちゃをたくさんもらうことを夢みだが、クラリネットをもらったときには、他のものをほしがることにはなくなった。サイモン・ラトルがすごい。リハーサルをみたが、偉大なマエストロだ<sup>51)</sup>。

この後、アブレウによって認められ、留学を経て、ロス・チョロスのスクレオの統括責任者として活動している。

## 6 刑務所への導入

### 6-1 ベネズエラにおける刑務所の特質

ベネズエラは南米でも有数の犯罪大国であり、特に首都カラカスは、世界でもっとも危険な都市のひとつである。誰もが、常に犯罪と隣り合わせで生活しているといわれる。犯罪者を収容する刑務所も、特異な性格をもっている。

第一に、刑務所は常に定員オーバーで、定員の数倍が収容されている場合もある。Díaz-Tremariasによると、2006年の段階で、刑務所の定員は、15000人だが、19257人が収容されていた。しかし、こうした全体的な平均では問題は理解できず、場所によって大きく異なるという。Santa Ana刑務所では、600人定員に2000名が収容されている。更に、既決の囚人と、未決の被告人とが同じ部屋に収容されたり、既決でも犯罪や刑期の違いが無視されている<sup>52)</sup>。

第二に、このような状況は、基本的な管理やサービスが疎かになっていることを示しているが、その結果、刑務所内で様々な犯罪が起きている。ドラッグ検査では、2000-2003年の570人の尿検査で49.1%がコカインとマリファナで陽性となったが、その内29.3%は使用を否定した。また銃などの武器を持ち込む者もいる<sup>53)</sup>。そうした状況の中で、暴動も頻繁におきている。

第三に、このような無法状態が生じる裏返しかもしれないが、ある程度の自由を認める習慣が、ベネズエラの刑務所にはあるという。家族が出入りしたり、刑務所内でパーティを開いたりすることが、暗黙のうちに認められているのである。十分な食事を与えることができないので、家族が補うことを認めざるをえず、そこから部外者の出入りを抑えることができなくなったと考えられている。

2011年、武装した囚人たちが、刑務所を占拠し、囚人たちを人質に刑務所に立て籠もるといふ暴動が起きた。ふたつの刑務所を巻き込んで、マフィア同士の争いになり、そこに警察が介入したが、制圧に1月ほどかかった<sup>54)</sup>。

2013年にも暴動がおき、死者が出ている。

ベネズエラ北西部バルキシメトのウリバナ刑務所で25日、受刑者らによる大規模な暴動が起き、少なくとも54人が死亡、88人が負傷した。

現地紙ユニベルサルによると、暴動は同日朝の所持品検査をきっかけに始まり、軍と受刑者の間で銃撃戦となった。近隣の病院に次々と負傷者が運び込まれており、犠牲者には受刑者のほか、牧師2人も含まれているという。

同国内では刑務所職員らの汚職や過剰収容などを背景に、暴動や禁制品の持ち込みが頻発。昨年1月からの6か月間で304人が死亡している。(サンパウロ)<sup>55)</sup>

刑務所の無法ぶりは、全く反対の様相を示すことも報道されている。

カリブ海に浮かぶベネズエラ領マルガリータ島の刑務所で、受刑者たちがディスコを「開業」、友人らを招いて大騒ぎをしていたことがわかった。地元紙ユニベルサルなどが報じた。

受刑者たちは「来る木曜、島が揺れる」と、スマートフォンからツイッターなどで家族や友人らに参加を呼びかけた。詳細は明らかになっていないが、刑務所に600人規模の会場を設け、音響や照明システムも用意したらしい。ストリップショーもあるとの触れ込みだったが、実際に行われたかは不明。(サンパウロ＝岩田誠司)<sup>56)</sup>

刑務所が荒廃し、暴力が横行するようになったのは、Kiraz Janickeによると、1980年代と90年代に新自由主義政策が導入され、貧富の格差が増大したあとだという。1994年に、Maracaibo's Sabaneta Prisonで暴動が起き、そのとき、刑務所の官吏は、「すべての死体はバラバラになって誰かが特定できないために、正確な死者の数は把握していない」と述べたという。その結果、更に暴動がひどくなり、内部で対立する暴力団が、爆弾を打ち込んだりして、惨殺、射殺、焼殺などで150人が死んだと報告されている<sup>57)</sup>。



囚人たちと話し合う政府の役人<sup>58)</sup>

NACLAレポートによると、このときのMaracaibo's Sabaneta Prisonは、定員800人に対して、2500人が収容され、監視の役人は不十分のためパトロールはほとんど行なわれず、銃火器を囚人たちが所有していたという。こうした状況は南米全体で見られるが、やはり、ベネズエラが突出していたようだ。当時ベネズエラでは、62%が貧困ライン以下で、その内の75%は食事が十分にとれない状況だった。犯罪が飛躍的に高まったが、刑務所に収容されるのは若者が多く、70%が18歳から25歳だった。囚人たちの70%は初等教育を終了しておらず、ほとんどが手作業の労働か農業に従事していた。ベネズエラの刑務所内での暴動が多いのは、他の南米諸国に比較して、囚人たちの扱いが劣悪だからだとされている<sup>59)</sup>。

Kiraz Janickeによれば、2008年におきた刑務所内でのハンガーストライキは、刑法の改正を求めるものだった。当時の刑法は1926年に制定され、1964年に一部改正されただけの、時代遅れのものだった。刑務所にあふれるひとたちは、有罪と決定された者だけではなく、未決の者も多く、裁判が滞りがちであるために、収容者が増えているという現実があり、囚人たちの訴えにも、合理性はあったのである。

## 6-2 刑務所の人間化計画

このような非人間的な状況を打破するために、チャベス大統領は、刑務所の人間化計画を公表し、実行に移す。

人間化計画は、2005年に刑務所の実態調査から始まった。チャベスは、あまりに酷い暴力に支配

され、崩壊した刑務所を前政権から引き継いだが、それを改善しようと図ったのである。そして、2006年に人間化の活動を始めた。当初は、食事、教育、健康を改善し、リクリエーション、保健、教育施設を充実させた15の新しい刑務所を建設するものだった。

そして、2007年にエル・システマと提携し、オーケストラ活動を導入したのである。

2008年には、刑務所内の武器を捜索し、押収している。更に心理学者等の専門家チームを結成して、囚人の評定や扱いの検討を開始している。その結果、2007年から2009年にかけて、刑務所内での暴力による死亡は498人から366人に減少したが、囚人の数は21171人から32624人に増加した。そして、全体としての刑務所の改善はあまり進んでいないと、2010年の段階では評価されていた。囚人やその家族のハンガー・ストライキや無理な改善要求などで、改善の歩みが遅くなっているという<sup>60)</sup>。

この刑務所の人間化計画には反対も強かった。刑務所の改善は、悪人のための政治をするのか、最も重要な犯罪者であるマフィアを利するだけではないか、社会のためになるのか、などという疑問であった。

そうした反対論に対して、人間化計画の責任者である大臣Iris Varelaはいう。

マフィアにとっては、刑務所の現状のままがいいのである。ドラッグやアルコールを売りつけることができ、銃で暴動を起こすこともでき、ときには刑務所を支配することもある。こうした中で、武器を押収し、非武装化することは、マフィア以外の囚人たちも望んでおり、実際に武器の押収は進んでいる。囚人たちも、社会に出たときには、まっとうに働きたいと願っている。現状ではそれが難しい。社会の受け入れと囚人たちの実際の労働能力がそれを阻害している。囚人に対して行なうベストのことは、社会主義能力と教育の全国施設Instituto Nacional de Capacitación y Educación Socialista (INCES)を通して。プロジェクトに参加させ、労働につかせることである。刑務所を人間的なものにし、そこで訓練をすることで、彼らも責任感をもつようになる<sup>61)</sup>。

こうした考えに基づいてチャベスは、新しいタイプの刑務所を建設していく。新しい刑務所とは、「人間化され、近代的な刑務所」「囚人たちのリハビリテーションの機会を確保し、職員を頼りにし、倫理的な理念と価値に支配され、社会に期待する転換をともなった組織的な調和を保障する」刑務所である。収容人数を減らし、安全対策がたてられ、個人の部屋、調理室、保養施設などの設備だけではなく、能力を発達させるためのコース、医療サービスなどを整備した刑務所である<sup>62)</sup>。

その柱の最も重要なものが「労働」を促進するための計画であろう。囚人は、烙印を押されてしまっているのだから、刑務所を出ても雇用の機会がない人が多い。そのための継続教育のプログラムを設け、人的資源を生み出すことを意図している。この計画は、「国立大学刑務所研究施設el Instituto Universitario Nacional de Estudios Penitenciarios (IUNEP) の研究に基づいて、刑務所のための人民省el Ministerio del Poder Popular para el Servicio Penitenciario (MPPSP) によって遂行される。そして、省庁横断的に実施しようという計画である<sup>63)</sup>。

新しい刑務所の一例では、収容870名、危険度小中大、隔離、労働、女性という7つの分類で分け、安全、監視、内部の奉仕、教育、文化、スポーツ、健康、労働などが管理される。職員の休息・福祉も重視され、6200万ドルの費用は、政府と刑務所構成全国基金で賄われる<sup>64)</sup>。また別の刑務所では監督官が、「新しいインフラを理解するだけではなく、囚人や家族の心理的リハビリや仕事の資格などについて共同の作業をするものである」と指示している。囚人は、自分の部屋、風呂、食堂と食事、医療、図書館、教室、スポーツ場、などをもち、判決を充たした後、社会に復帰できるようにするためである<sup>65)</sup>。

ベネズエラの刑務所は、日本とは基本的なところで異なっていることに注意する必要がある。ベネズエラは死刑がない<sup>66)</sup>。そして、法的規定としては「懲役」もあるが、実際に労働を管理する人員や労働そのものを配備するシステムも機能しておらず、事実上、囚人は日本の禁固状態に置かれ

る。

そこで政府が考えたことは、満足する活動をさせるということである。

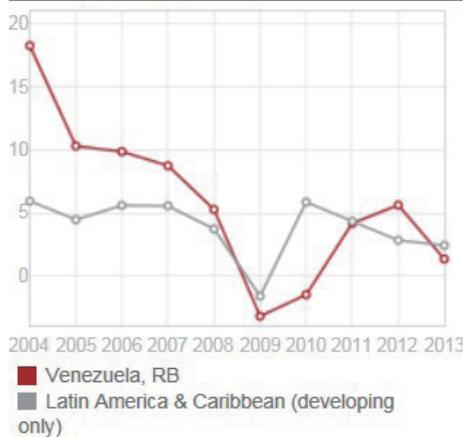
Consuelo Cerradaは、政府が囚人たちも含めて人間の尊厳を重視しており、刑務所システムの人間化の背後に、自由を奪われた人に関連して、刑務所内のサービスを求めたり受けたりするための努力をする政策がある。我々は、暗闇と投げやりから抜け出る。闘い続けることが大切として、更に、刑務所センターでの劇場プログラムやスポーツが必要であることを主張している<sup>67)</sup>。そうした人間化のためのプログラムのひとつが、エル・システムの刑務所への導入であった。

当初反対も少なくなかった刑務所改善の手段としての人間化は、議会でも支持されるようになる。刑務所の中に組織をつくっているマフィアを破壊するには、刑務所の人間化でのみ可能であると、議会が支持したのである<sup>68)</sup>。もちろん、それで刑務所内の暴動が消滅したわけではなく、先に述べたように最近も起こっている。

しかし、チャベスは、提起してから次第に予算を増大させていった。

この時期ベネズエラ経済はむしろマイナス成長であったことは、銘記すべき状況である。チャベスの石油企業国有化の影響等もあり、かなり財政的には厳しかったのである。

GDP growth (annual %)



Data from World Bank

ベネズエラ経済の推移<sup>69)</sup>

2008年7月12日に、新しい刑務所人間化のプランがはじまり、チャベス大統領が、ベネズエラ刑務所の改革の一環として、囚人たちのQOLを高めるために、刑務所に合唱団をおくことの開会式を行なった。50年前から起きていた虐待や無視などのない、ベネズエラ政府の巨大な歩みであることを、式典は示したと報道されている<sup>70)</sup>。

更に、2010年8月18日に、チャベス大統領は、刑務所の人間化プロジェクトのための予算措置を発表しており、6億5百万ボリバルを支出し、多くは個別の刑務所への費用だが、1千万ボリバルが刑務所のためのエル・システム用としている。そして、4千7百万ボリバルを囚人たちのための措置として予算化している。チャベスによると、労働や文化こそ、囚人の更生に必要ということだ<sup>71)</sup>。

更に、2011年9月24日には、刑務所の人間化のためには、139百万を支出する。生活の質を高めるため。ミランダ州のテクスTeques女性刑務所el Instituto Nacional de Orientación Femenina (Inof)のための支出すると公表した<sup>72)</sup>。

これを報じた記者は、次のように評価している。

チャベスは、ベネズエラ刑務所におけるリハビリ、メンテナンス、活性化のビジョンの修正をした。それは刑務所だけではなく、国全体の生活の質を高めるためである。人間の搾取からなりたっている資本主義とは異なる社会の構成をつくり、自由を実現するためのものである。人間の自由を完全にするためには、条件が必要である。刑務所では、閉鎖的な機構から開放的な機構に転換し、罪を償わせ、深い学習をさせることで、社会復帰の動機づけをさせる必要がある。閉鎖的な囲い込みは、他の人に暴力を振る場合のみである。他の基本的な人生の価値を再発見させる必要がある<sup>73)</sup>。

## 7 エル・システムの刑務所への導入

### 7-1 概要

音楽を通して社会を変革し、よき人間を形成するのであれば、最終的には、犯罪を犯した人を更生させることが、当然の課題となるだろう。そして、それを実行に移し、アブレウは次のように述

べた。

エル・システムは、釈放された個人のリハビリのために、精力的に貢献するために、刑務所に入っていった、そして、オーケストラと合唱を、リハビリと社会的復帰の特別な旗に変えた。

友愛、チームの中での仕事、尊敬、寛容の価値を形成する教育の方法をつかい、それらは、社会的統合とプログラム参加者の生産性を達成することに貢献する<sup>74)</sup>。

他方、刑務所の側からみれば、これは、人間化プログラムの重要な一環として導入されたのである。実際の導入に際して、最も大きな力を発揮して、かつ責任者として活動しているのは、Kleiberth Lenín Mora Aragón (以下モラ) という弁護士である。14歳でエル・システムに入り、16歳でシモン・ボリバル音楽院で学ぶためにカラカスに出てきて、ホルン奏者としてオーケストラ活動をするかたわら法律学を学び、2004年に、デレコ国際人間学の学位を取得あと、犯罪学の修士をとり、2005年に法曹資格をとった。そして、国際人権と犯罪学の教授資格をもっている。モラは、2007年に実際に活動を始める前に4年間ほどの準備期間が必要だったと述べている<sup>75)</sup>。

エル・システムの刑務所への導入は、刑務所教育プログラムPAP El Programa Académico Penitenciarioと呼ばれ、内務・法務大臣とエル・システムの合意によって、2007年2月7日に導入された。刑務所の中の暴力の水準を最少にするための方策として創設され、学習や練習、音楽の楽しみを通して、囚人たちの社会復帰のプロセスを促進することを目的としていた<sup>76)</sup>。そして、IDB (米州開発銀行) の財政的な補助を受けていた。導入から2013年の終わりまでに、7900人の囚人の参加があり、8つの刑務所センターに割り当てられ、11のスクレオとして機能した。700以上のコンサートが、刑務所、リサイタル室、コンサート場で、更に、模範演奏、エキシビジョンが、囚人やその家族のために開かれた。国のさまざまなコンサート会場で、刑務所の外部にもおこなった。特に、代表的なコンサートホールであるテレサ・カレーニョ劇場でも、複数のスクレオによる合同オーケストラ300人の演奏会も開かれている<sup>77)</sup>。

刑務所オーケストラの演奏会<sup>78)</sup>

## 7-2 参加の条件

モラによれば、2012年の段階で、1300名が参加し、述べ人数は5300人を超えている。ではどのようにして参加者を決めるのか。

モラによれば、募集はオープンで、囚人を犯した犯罪などで差別しない。参加を認めるために囚人に求めるのは、個人的な身だしなみに注意し、レッスンをきちんと受けること、丁寧な言葉使いと声の調子、叫ばない、仲間や教師に敬意を払うというルールを守ることである<sup>79)</sup>。

楽器の割り当ては、通常のエル・システムの場合とはいくつかの点で異なる。子どもの場合は、じっくり時間をかけ、いくつか試しながら選んでいくが、囚人は刑期の間に成果をあげる必要があり、教師の方が身体的な特質や気質を考慮して決めることが多い。楽器と人間性には相関があり、気質にあわない楽器を選択すると、あまり上達しないことが知られている<sup>80)</sup>。

楽器をもつと囚人たちは大きく変わっていくという。オーケストラの楽器は、いずれも高価なものであり、それを無償で貸与され、自由に扱うことが許されると、囚人たちは、自分を一人前の人間として扱われたと感じるのである。モラは、「楽器が、自由を制限された青年の手にふれると、犯罪者から、物質的な貧しさを取り払い、精神的豊かさの中に沈み込むのです。そこでは奇跡が起き、更生が始まるのです。」と述べている<sup>81)</sup>。

次の問題はセキュリティである。殺人を犯した囚人もいる。しかし、内部的な拘束は設定しておらず、当初は刑務所の係官が同席もしていたが、その内教師と囚人たちだけで練習を行なうようになった。つまり特別なセキュリティ対策をとって

いないのである。囚人たちが乱暴なことをしたことはなく、互いの信頼感があるという。

モラは次のように述べる。

教師たちは、更に、とても成功したひとたちで、高いレベルの音楽の専門家であり、国中のいかなる音楽大学でも仕事ができるし、またここでなされている仕事が好きなのです。彼らは多くの才能もっています。それが囚人たちに、倫理的、人間的に比較できないほどの価値をあたえています。教師たちの人物像は特別で、とてもよく表わされているし、囚人たちと尊敬の念で接し、囚人たちは、教師たちの行動を真似たいとまで感じるのです。

## 7-3 実践の方法

では、どのように実践をしているのだろうか<sup>82)</sup>。

まず、囚人たちと交流することから始める。意見を交換することを求め、彼らの不満を聞き、こちらの考えるものを与えるのではなく、彼らの要求に応えるようにする。まずはサッカーやバスケットのボールをあたえ、一緒に遊んだりして、彼らの価値を見いだすように努力する。そういう中で、彼らは、握手したり、話をしたりする誰かに飢えている人たちなのだ、厳しく、硬い顔や、困難な側面の背後に、彼らは注意を払い、何か有益なことを望み、無用なものになりたくないと思っている、知識に貪欲であるし、克服したいと思っていることがわかってくる。

そうした後でオーケストラを開始する。

実践方法は通常のエル・システムと同じであるが、先述した楽器選択と、音楽言語の授業が理論的というより実際のなものに変えている。囚人たちは子どもたちより飽きっぽく、成果が現れるのを長く待つことができない。そのため興味をもたせるために、実際の練習を早く始め、理論的な授業は補充する形になっている。

セクションごと、弦、木管、金管、打楽器など、音楽院と同じように行なわれている。彼らは月曜日のレッスンから、金曜日まで、朝9時から夕方まで、練習し、もちろん、非常に速い進歩が認められ、早い結果が達成される。一日の大部分を楽器の修得に費やし、以前の余暇の時間、活動しな

い時間、あるいは喧嘩する時間さえも練習にあてるからである。こうした進歩がみられるようになると、服装や生活態度の改善も顕著になるといえる<sup>83)</sup>。

モラは次のように述べている。

私は、ベネズエラの刑務所を旅して、座って、囚人たちと話をしました。そして彼らに生活について、犯罪を犯したことについて、それをどう感じているか、その点について、考えていることについて質問しました。最初は一人でしたが、あとで、教授がつくようになり、その会話の中で、共通のパターンがあることを発見したのです。彼らは、盗んだり、殺したりしたときに感じるアドレナリンが好きなのです。そして、公衆の前で演奏するときも、たくさんのアドレナリンを放出するというのを。

つまり、犯罪を犯すときに感じるアドレナリンの快感を、オーケストラ活動に伴う積極的なアドレナリンに転換することができるというのである。

子どものためのエル・システムでも、必ずしもクラシック系の曲ばかりをやるわけではないが、刑務所での活動では、より多くの民衆音楽や楽器も様々な身近なものを取り入れている。サルサのリズムのつたベネズエラ音楽など、典型的なベネズエラ音楽や、アリ・プリメラのポピュラーソングの管弦楽アレンジなどもとり入れる。エレクトリック・ギターや通常のギター、カトロなども取り入れている。

刑務所人間化プロジェクトでは、いくつものプロジェクトがあり、他のプログラムの実施でかえって事態が悪化したことも少なくなかった。囚人たちは不安をもつことが多く、ともすると暴発してしまうのである。従って、練習の際の言葉使いなどは、やはり、気を使うようだ。彼らの使う言葉使いを和らげるようにいうときでも、人格や性質を変えるようなことを求めるのではなく、言葉に気をつけ、彼らの攻撃性を注意して、争いの危険性、攻撃性をなくすようにしている。うまくいかないときでも、プロジェクトを囚人から取り上げることはしないが、辞めることは本人の意思である。居ずらくなることもあるという。



刑務所オーケストラの練習風景<sup>84)</sup>

通常のエル・システムでは、特に危険な地域で、帰宅途上襲われて奪われる可能性がある場合を除いて、子どもたちは貸与された楽器を練習後家庭に持ち帰る。しかし、刑務所は閉鎖的な空間であり、かつ、参加している囚人は少数である。楽器は争いの原因となるだけでなく、武器にもなるので、原則として練習時間のみ触れることができる<sup>85)</sup>。しかし、特別に、週末部屋に持ち帰るのを許可する場合もある。彼らに責任感、財産所有の大切さを理解させるためには、持ち帰って練習することを許可することは、積極的な意味があり、どのような処置をするのがよいのか、研究がなされている。

#### 7-4 参加者の様子

実際の参加者の声を聞いてみよう。実はまだ囚人の多くはこの活動に参加しておらず、2割ほどだという。

テクス女性刑務所のエル・システムに参加していたホアンニ・アルダナは、「ピオラは、私の人生を変え、よりよい生活にはいついけるための最後の接点だった」と述べている。誘拐の罪で捕まったが、Los Tequesの3つの女性刑務所 Instituto Nacional de Orientación Femenina (INOF) が関わるオーケストラのプロジェクトに参加した35名の中の一人だった。2008年4月に開かれたカラカスのテレサ・カレーニョ劇場の演奏会にも参加した。「何かが違うのです。違うように感じさせてくれます。このように時間をつかうことをこれまで考えたこともありませんでした。以前の私の趣味は電子音楽でしたが、今では、まずここを出ることを考えています。それで二人の娘に音楽をさ

せています。」とアルダナは述べている<sup>86)</sup>。「私は、オーケストラのなかで、悪い考えをはきだした。まだ、ときどき絶望的になる。子どもが、母親の犯罪によって、自分たちの生活が壊されたと責めることがある」という。彼女について「おそらく、このような喪失を音楽の量が代替するわけではないが、子どもの言葉が、楽器を演奏する情熱を説明している。演奏をしているとき、涙をながすのを見ることは、稀というわけではない。」と記者のSimon Romeroは書いている<sup>87)</sup>。

マレーシア出身のNurul Asyiqin Ahmadは、麻薬密輸の罪で捕まり、無罪を主張したが、カラカス郊外の刑務所に入ることになった。当初絶望的になり、人生を悪夢と感じたが、オーケストラのプロジェクトに参加してバイオリンを担当した。そして、演奏会でベートーヴェンの第九交響曲を演奏している。「音楽が始まると、私はこの場所から浮揚するのです。」と述べ、オーケストラと合唱に参加している<sup>88)</sup>。

「これの前は、私の音楽はレゲエだった」と述べるイルマ・ゴンザレス29歳は、路上行商人で、盗みで6年の刑期である。レゲエ、ヒップホップ、そしてラテンポップスがベネズエラのスラムで人気があり、そうした音楽だけを好んでいた。しかし、オーケストラに参加して、ダブルベースを弾いている。彼女のもっとも誇りとなる時間は、9、10、13、14歳の子どもたちが、彼女の演奏を聴きにきたことだ。「子どもたちが私を誉めたとき、私はこの人生でとうとう有用だと感じた。」とゴンザレスは述べ、他の囚人と同じく、オーケストラで刑期を短縮したいと考えている<sup>89)</sup>。



刑務所オーケストラの練習風景<sup>90)</sup>

西ベネズエラのCoroの刑務所は、四方が塀で

囲まれ、無数の監視カメラがある。300人の囚人が音楽の腕を磨くための準備をしている。半分は楽器、半分は歌である。囚人たちには、大工仕事やメタル作業、裁縫なども与えられるが、音楽が最も人気があるという。囚人でコンサートマスターの23歳Elisaul Salasは「演奏しているとき、とても誇りに感じ、責任感も感じる。第一バイオリンは責任があるんだ。自信をもたせてくれると、更に進歩していきたいという意欲がでる。」と述べている。

Abel Jimenez所長は、「この方法のおかげで、かつてないほど、物事が刑務所内でうまく機能している。囚人たちは楽器の世話をしている、責任があると思っているからだ。」と述べている。オーケストラに入るためには、囚人たちは、よい行いをしなければならぬ、そして、音楽教師たちは、衛生的な点ときちんとした服装を主張している。5日間、一日8時間のレッスンへの出席を求められる。既に7つの刑務所で機能しており、さらにプログラムは3つの刑務所に拡大される予定である。

28歳のRamio rondonはギャングでMeridaの刑務所に3年いたが、今はクラリネットを吹いている。出所後もレッスンを受けている。「自分の人生は100%変わった。最初は困難だったが、方法を変え、努力をして、ベストをつくしている。」<sup>91)</sup>

## 7-5 効果

モラが政治家を説得するのに4年間も要したことは、刑務所でオーケストラなどやってどのような効果、利益があるのか疑問が強かったからだろう。これは決して、政治家だけの問題ではなかった。

「刑務所生活の尊厳を得るには、司法と刑務所が全市民の問題であって、政府の問題ではないことを理解することである。しかし、ベネズエラ市民はこのプロセスに参加したくないし、刑務所を無視している。」と刑務所人間化プロジェクトの責任者であるイナルド・ヒダルゴが語るような状況があった。そうした中で始められたプロジェクトなのである<sup>92)</sup>。

エル・システム本部の声明によれば次のようである。

刑務所オーケストラと合唱のネットワークは、囚人の社会的再統合の過程を促進し、活動（授業、セッション練習、教育、コンサート）しつけ、自己評価、コミュニケーションのリハビリ、メンバーとしての感覚、そして、責任感を獲得することができる。

克服のための日々の挑戦、目標に向かっての動機、チームの中での働き、誠実、自己評価、メンバーとしての感覚、コミットメント、そして、コミュニケーションといった価値や理念を参加者は培っていく<sup>93)</sup>。

しかし、このような原則によって、実際的な社会的利益について納得することは難しい。まだ新しい試みであるために、出所した人の再犯などについての明確な統計は出ていないと思われる。しかし、モラに案内されてBarinas Penitentiaryを訪れたNathan Schramは、次のような計算をしている。

レーニン・モラと話しているときに、アメリカの刑務所でエル・システムをやることについて議論した。しかし、議論しているうちに、ふたつのシステムが違うことに気づいてきた。平均的な刑期はアメリカでは5年だが、ベネズエラでは1-2年だ。最長はベネズエラでは30年。死刑はベネズエラではない。アメリカでは3287人が死刑囚であり、14万人が終身刑だ。アメリカでは、一人の囚人に31000ドルかかっているが、一人の生徒の教育費は、8000ドルだ<sup>94)</sup>。

生徒の費用は学校教育の費用であり、エル・システムにおけるオーケストラの費用ではないが、趣旨は、オーケストラという再教育に費用をかけたほうが、低コストであるというものだろう。もちろん、アメリカでの囚人にかかる費用と、ベネズエラのそれとは異なり、ベネズエラではほとんど費用をかけないことによって、暴動が起きたりするのだが、もし、何も教育せずに出所した場合の再犯の可能性を考慮すれば、対費用効果はプラスのものと考えerことは無理ではない。現時点での効果の予測は、オーケストラ活動をしている人達の生活と意識の改善の度合いだろう。

Nathan Schramはオーケストラの練習をみた感想を次のように書いている。

私が本当に興奮していることは、ここでの個人的な体験だ。このビルの中にあるエネルギーの種類がわかるように、私は、説明しなければならない。つまり、この音楽家たちと過ごした2時間後、私の顔は、笑いで歪み、崩れてしまった。私はそれまで音楽とそのエネルギーにこれほど感化されたことはなかった。おそらく、それは、ホロボJoropoのスリリングなサウンド、あるいは私の訪問に感謝する囚人の力強い即興のボーカルだった。あるいは、おそらく、一人の教師の流れるようなサポートだった。彼は、私がこれまでの人生で聴いたなかで最も高い技術で、躍動するハーブ演奏を示したのである。正直になろう。この囚人たちは、毎日9-11:30にパーティをしているのだ。素晴らしいことだ<sup>95)</sup>。

では、具体的な成果と考えられるものを整理してみよう。

何よりも、社会にむけての大きな成果は、2008年4月に行なわれたテレサ・カレーニョ劇場での最初の演奏会だろう。3つの刑務所の136名のメンバーによって行なわれ、大きな感動を与えた。参加したメンバーのGlenda Yulánも、自分の子どもに見せたかったし、また、見ている子どもを見ていたかった、とそれが実現した喜びを語っている<sup>96)</sup>。

モラは、2011年に、地域の劇場や刑務所、スクレオで100以上のコンサートを開催していると紹介している<sup>97)</sup>。

2011年3月24日にINOFのオーケストラの公演が、カラカスの刑務所センターで行なわれた。そして、手作りの刑務所フェアが、la plaza Pueblos y Saberesで行なわれた。ペインティング、彫刻、工芸などが展示され、9つの刑務所から出典された。内務副大臣のEdwin Rojasが、刑務所の人間化プロジェクトの一環であると説明した。非常に積極的なサンプルを提示している。一般市民と囚人300人が、別々の枠で活動した。翌週別の市でも行なう。囚人自身の活動で19の刑務所が行なった<sup>98)</sup>。

こうした中で、プロジェクトの責任者のEddiger Guerreroは、オーケストラは、囚人たち

の改善、言葉、個人トイレや人間関係の改善に寄与した。「おおくの場合、刑務所が学校のようになり、罰を与えたことなどない」と述べ、テクスのオーケストラの指導者であるFreddy Ibarraは、音楽プロジェクトの最も美しいものは、多様な効果です。」と述べ、囚人たちに尊厳を与えること、社会へ再統合することは可能だと示唆している<sup>99)</sup>。



刑務所内の展示会

こうした成功を支えているのは、献身的に活動している教師たちである。ヨーロッパ的水準では、とても容認されない過重労働を行なっていることをカウフマンは指摘しているが、それは決して批判的なコメントではない。

Hildemoro 29歳が、教師としてはいったのは、午後やることなく、母親は経済の勉強をするようにいったが、ここのスタッフをやりたいという情熱をもっていた。音楽の重要性は、どこの社会でも認めているのに、学校の音楽教育は、芸術の価値を認めていない。エル・システムの指導者たちの目的は、音楽を通して社会を変革することである。オーケストラは、コミュニティであり、相互に関係する対象である。合意、チーム、グループ、相互依存、責任などを学ぶ。アブレウの言葉「実践せよ、そして闘え」に共感して、教師としての仕事を続けている<sup>100)</sup>。

しかし、刑務所における活動が、すべて順調にいつているわけではなく、課題もある。

第一に、刑務所内の条件は、いまだに劣悪であり、かつ裁判の遅延によって多くの問題が発生し

ている状況に変化はあまりなく、そのことが報道すらされていないという指摘がある。既決と未決が同居しており、管理が十分に行なわれていない環境は、改善が進んでいないという<sup>101)</sup>。

第二は、成果を社会に示すこと自体の問題である。モラは、刑務所で音楽活動に勤しむ人は、とても囚人には見えず、彼らは社会に出て、有益な活動をしたいと望んでいる。エル・システムでは、自由になった囚人の9人を教師として雇用し、また音楽の勉強を継続できるように奨学金を給付したり、あるいは楽器制作者になっている者もいる。彼らは再犯をしていない。しかし、実際に子どもを殺害された被害者があり、彼らにとって、このプロジェクトを理解することは容易ではないとモラはいう。

社会全体として見れば、犯罪者が更生するより、更生しないままに再犯を繰り返す方が、ずっと危険であり、社会的コストを増大させるが、被害者にとっては、受け入れがたい感情が残るのも否定できないし、犯罪者が更生して社会に復帰することを望まない市民感情があることも事実であろう。更生と被害者感情の問題は、更生が効果的に行なわれているからこそ、鋭く問われている。

## 8 まとめ

アブレウが主張する「音楽を通しての社会変革」という課題は達成されているのだろうか。エル・システムの運動が始まって40年が経過しているが、そのなかで、犯罪と日常的に接している子どもたちの安全を守ってきたことは、確実な成果としてあげられるだろう。社会的にそのことが認識されたからこそ、特に危険性の高い地域からのヌクレオ設置の要望が寄せられている。エル・システムが実施されてきた40年で、犯罪が減ったわけではないという批判もあるが、犯罪そのものの増減は、社会全体の政策や国際動向（移民の増加など）も関係しており、エル・システムの評価と結びつけるのは適当ではない。

では、非行や犯罪を犯した者の更生をもたらす点はどうだろうか。刑務所でのエル・システムは、2007年に始まったばかりであり、確実な成果が出

ているわけではないし、再犯率などの統計的な実態が積み上げられた時点で、正確な評価がなされるべきだろう。しかし、実際に訪れたひと、そして、実際に活動に参加しているひとの高い評価があることは間違いない。教師たちは、出所したあとの再犯はないと考えていることは先述した通りである。もちろん、それは実際に詳細に知ることではないだろうが、エル・システムの教師や様々な要員として雇用されている者がおり、子どものために生活を立てなおす決意を固めて社会に復帰した者がいることは、実際に教師たちが体験として知っていることである。更に、囚人たちが、オーケストラの活動中、教師への悪い対応はほとんどなく、刑務所内の暴力が減少していることも、体験的に語られている。従って、エル・システムが犯罪を犯した者の更生に、大きな可能性を示していることは、確かであろう。

では、その理由は何か。

これまでの矯正教育の原理を逆転させていることに注目すべきであろう。刑務所は犯罪を犯した人間が収容されており、罰を与えることによって、償いをさせる。現在では、「教育刑」という考えによって、社会復帰をスムーズにさせるための様々な取り組みがなされている。厳格な時間による生活習慣を送らせ、労働をさせることで、復帰後の生活の手段を獲得させようとしている。また、刑務所内で行なわれる講習やカウンセリングによって、犯罪を犯してしまう心理や状況を理解させ、再びそのような状況に陥らないようなコントロール能力をつけさせようとしている。日本のように、高度な水準でそれらを実施している国であっても、再犯率は決して低くはない。こうした処遇は、基本的には「刑期」の間のものであり、更生の有無にかかわらず、刑期が終了すれば、出所して社会に復帰することになる。罰はもちろん、講習なども、犯罪というネガティブな行為を自覚させることを意図したものであり、それ以上のものではない。反省したことによって、人間的な誇りや未来への希望を見いだすわけではない。ベネズエラの刑務所は、従来、単に閉じ込めておくだけのもの、労働をさせる体制が整っているわけではなく、まして、犯罪克服のための講習やカウ

ンセリングなどはなかった。

エル・システムが刑務所に導入したものは、人間をポジティブにする活動である。能重真作が『ブリキの勲章』で書いているように、非行というブリキの勲章ではなく、本物の勲章を与えねばならないという主張と同じ原則がある。能重は、ほんものの勲章を獲得したとき、非行を本当に克服できるのだと考えて実践を行っていたが、エル・システムは、囚人に勲章を与えたといえる。

モラは、囚人の多くは、父親も自分の誕生日も知らないまま育ち、家庭や地域の中でも、暴力と直面しながら生きてきた、医者とか、エンジニアとか、法律家になるなど期待することもできない。そして、知的発達、感情的発達、そして栄養などを獲得するという実際的な可能性や機会などもないから、諦めてしまうのであり、ものごとの蓄積など期待できないと述べている。そして、目標ができ、それを達成すると、希望で満たされる、と。

そうした目標の具体的なものが、「公開演奏」である。公開演奏で、拍手を浴びることが、大きな意味をもつ。囚人たちの多くは、大人数から拍手喝采されることなど、ほとんど経験がない。自分たちの演奏が喝采を浴びることで、自尊感情が確実に向上し、自分が社会に役立つ人間になりうることを実感し、信じることができるという<sup>102)</sup>。

アブレウは、「オーケストラや合唱は、生活のための学校となり、態度や行動を育て、倫理、市民性、審美性、精神性や社会性を学ぶのである」と繰り返し述べているが、それは何故だろうか。

オーケストラは100名前後、あるいはもっと多数の人々が、協力して行なう活動であり、相互の協力が不可欠である。そして、個々の奏者は自分の役割を果たす必要があり、それはかなりの練習を必要とする。演奏に対する責任を負っているわけである。これが、態度や行動、倫理性、市民性、そして責任感等を培う。長い練習を経て、公開演奏になるのだが、最初の練習から、次第に整い、美しい響きが作られていく。そこで審美性が育っていく。そして、公開演奏の拍手は、聴衆の感動だけではなく、演奏したオーケストラの人達をも感動させる。オーケストラの演奏は、スポーツのように敗者は生まない。いくら努力してもスポー

ツであれば、半数は敗者になるのであって、そこに挫折感が生じる余地があるが、オーケストラは全員が感動できる。

モラは、「彼らは、プロジェクトに向かうと、自由を得て、刑務所を去るときに、人生の計画を意識することができ、未来のプロジェクトを作成することができるようになるのです。音楽は、社会そのもの、あるいは人生と同じことのアナロジーなのです。」と述べているが、刑務所の中で活動してきたモラの実感であろう<sup>103)</sup>。

## 注

- 1) 古代ギリシャの哲学者は、音楽が人格形成にとって不可欠の要素であり、音楽が円満な人格をつくると考えていた。ハワード・グッドール『音楽の進化史』河出書房新社 p21
- 2) ブルーノ・ワルター「音楽の道徳的力について」フィッシャー『音楽を愛する友へ』所収 佐野利勝訳 新潮文庫 p96
- 3) 同上 p118-119
- 4) 同上 p103 ワルターは調性を否定する現代音楽に否定的であったのは、単に音楽的理由だけではなくと考えられる。
- 5) 本稿は当初音楽編と社会変革編をともに扱うものだったが、大部になったことと、音楽編は多数の研究書があるために、社会変革編を（下）として先に公表することにした。そのため、エル・システムの通常的发展過程は全て省かれているが、それは来年（上）として公表する予定である。何故オーケストラの運動であることが、多数の国際的に活躍する演奏家を多数生んだのかは、（上）で考察する。
- 6) 山田真一『エル・システム』教育評論社
- 7) Michael Kaufmann “Das Bunder von Caracas” 2011 s13
- 8) ibid s202
- 9) Joshua Goodman “Gustavo Dudamel Blasted by Critics for Not Speaking out Agaisnt Nicolas Maduro”  
[http://www.huffingtonpost.com/2014/02/14/gustavo-dudamel-critics\\_n\\_4791126.html](http://www.huffingtonpost.com/2014/02/14/gustavo-dudamel-critics_n_4791126.html)
- 10) ピエール・ブルデュー『再生産』宮島喬訳 p25
- 11) ブルデューは次のようにも書いている。「教育的はたらきかけは、権威の委任からその教育的権威を引きだしているかぎり、教育的働きかけをこうむる者のうちに、ひとつの集団または階級がかれらの文化との間に維持する関係、すなわち文化的恣意としてのその文化の客観的心理の誤認（エスノセントリズム）を再生産する傾向がある。同上p51
- 12) ここでクラシック音楽とは、レナード・バースタインの「厳格に記譜された音楽」という定義による。
- 13) これ自体多くの検討課題をもっているが、この論文の課題は別にあるので、通説的理解に従っておく。詳しくは（上）で扱う。
- 14) 例外は人気のあるオペラ作曲家だった。
- 15) 全体的にクラシック音楽の世界で非白人、特に黒人が全く活躍していないわけではない。しかし、多くが声楽家であり、欧米のオペラ劇場では、黒人歌手は多数活躍している。初めてウィーンの歌劇場で歌った黒人歌手であるレオタイン・ブライス、グレース・バンブリー、ジェシー・ノーマン、サイモン・エステスなど、黒人のオペラ歌手は、ヨーロッパでも活躍している。  
クラシック音楽の世界で、黒人が歌手の分野で活躍できるのは、歌手は10代後半、あるいは20代になってトレーニングを始めればよいこと、肉体が楽器なので、高価な楽器が必要ないことなどが理由であろう。小さいころから専門的な訓練が必要なバイオリンなどの分野では、いまだに黒人のトップ演奏家は出ていない。
- 16) 以上のアメリカの状況はTammy Kimによる。  
<http://projects.aljazeera.com/2014/detroit-music/>  
Arthur Davisの記事は、Jocelyn Y. Stewart ‘Art Davis, renowned bassist, dies at 73’ “The Seattle Times” 2007.8.5
- 17) <http://www.ve.emb-japan.go.jp/kinkyu/Anzen%20taisaku%20joho/kaigai%20anzen%20taisaku201404-06.pdf>

- 18) <http://aplac.info/gogaku/icpo.html>
- 19) 朝日新聞2013.3.9
- 20) Michael Kaufmann “Das Bunder von Caracas” 2011 s75
- 21) 「エル・システムは、子どもを通じて社会に、オーケストラがもつ力を活用することで、子ども自身を、そして社会をよりよく変えることを示したのだ。」(山岸淳子『ドラッカーとオーケストラの組織論』PHP選書2013 p289
- 22) Tricia Tunstall “Changing Lives — Gustavo Dudamel, El Sistema, and the transformation Power if Music” 2002 p52-53
- 23) 残念ながら、当時反対の論陣をはっていたという人の文献がみあたらない。
- 24) Kaufmann s3
- 25) アンヘル・サウセAngel Sauceはベネズエラの有名な作曲家・指揮者であり、ファン・ホセ・ランダエタ音楽院の校長だった。アブレウと協力してユース・オーケストラの活動を始めたが、校長やベネズエラ交響楽団の指揮者としての活動に重点があり、その後の活動はほとんどアブレウによってになわれた。当初アブレウのオーケストラは、その音楽院の名前を冠していた。
- 26) 山田 p144-153
- 27) Kaufmann s67
- 28) Kaufmann s68
- 29) <http://fundamusical.org.ve/contacto/preguntas-frecuentes-faqs/#.U6mH-8uKCck>
- 30) op.cit
- 31) <http://fundamusical.org.ve/contacto/preguntas-frecuentes-faqs/#.U6mH-8uKCck>
- 32) IDB (米州開発銀行) の報告書によると、ベネズエラの若者の主な社会的リスクは、10代の妊娠とそれに伴う妊婦の死亡、学校からのドロップアウト、暴力的犯罪であり、エル・システムの対応を高く評価している。“IDB Country Strategy with the Bolivarian Republic of Venezuela 2011-2014” p10-11
- 33) そうした典型例は、ベルリン・フィルのコントラバス奏者に17歳でなったルイスである。
- 34) Kaufmann s72 この町について、日本人のブログで「さすが州都のマトゥリン、色々な面白い物ができました！ でも、やっぱ道端では物乞いしてる人がたくさんいるし、栄えてる故危険なこともあるし、外にいる時は気が休まないです。」と書かれている。
- <http://ameblo.jp/jun68-venezuela/entry-10700634151.html>
- 35) Shiriley Apthorp ‘Strings from the slum’ “The Strad” 2004.2
- 36) Kaufmann s203 山田は、同じヌクレオの状況を、練習施設がりっぱな施設と紹介しているが、カウフマンが見たときから改善されていたものと思われる。
- 37) Kaufmann s204
- 38) TED Prizeについては、<http://www.ted.com/participate/ted-prize>
- 39) <http://www.visualecture.com/wordpress/?p=1306>
- 40) Nicolas Billaux “New directions for classical music in Venezuela” p10
- IDBの2007年の援助については、‘IDB approves US \$150 million to support youth orchestras in Venezuela Program to benefit thousands of children from country’s poorest strata’ 2007.6.6
- <http://www.iadb.org/en/news/news-releases/2007-06-06/idb-approves-us-150-million-to-support-youth-orchestras-in-venezuela,3889.html>
- 41) googleの画像検索による
- 42) N. Billaux op. cit, 12
- 43) Ed Vulliamy “Orchestral manoeuvres” 2007.7.29
- <http://www.sjvsb.com/2007/07/orchestral-manoeuvres/>
- 44) ibid
- 45) 「全国少年施設」という意味だが、山田氏の訳語に従っておく。
- 46) Patricia C. Marquez “The Street is My Home” Stanford University Press 1999 p150-152
- 47) トリシア・タンストール 前掲p49 山田前掲 p259
- 48) Shiriley Apthorp ibid
- 49) La orquesta los sacó del barrio 5. AMÉRICA,

- Venezuela|31/01/2013  
<http://gigantesdelaeducacion.com/la-orquesta-los-saco-del-barrio/>
- 50) <http://fundamusical.org.ve/multimedia/mas-de-11-mil-instrumentos-fueron-distribuidos-en-los-nucleos-y-modulos-del-pais/#.VEEbC8scSck>
- 51) Kaufmann p263-270
- 52) Díaz-Tremarias 'Las cárceles y población reclusa en Venezuela' 2008
- 53) ibid
- 54) Inmates at Venezuela's Rodeo prison free 'hostages' BBCニュース 2011.7.8
- 55) 朝日新聞 2013.1.27 ニューヨークタイムズは、2011年に560人が刑務所で殺害され、2012年に55人が殺害されていることを伝えている。2013.1.26  
 なお、Venezuela Prison Observatoryは2012年の死者を591としている。  
<https://www.whatsnextvenezuela.com/tag/venezuelan-prisons-observatory/>
- 56) 朝日新聞2013.4.3
- 57) Venezuela Moves to Humanize Prison System Amidst Hunger Strikes Kiraz Janicke 2008.3.11
- 58) Vice Minister for Justice, Tarek El Aissami meets with inmates in the La Planta prison (Zurimar Campos, ABN)
- 59) Mark Ungar NACLA Report on the Americas, Sept/Oct 1996 Venezuela's Explosive Penitentiary Crisis  
<http://www.hartford-hwp.com/archives/42/169.html>
- 60) James Suggett 'Venezuelan Prison Humanization Program Initiates New Educational Project' <http://venezuelanalysis.com/news/5420>
- 61) Sistema Penitenciario trabajará con privados de libertad en áreas social y política.  
<http://www.correodelorinoco.gob.ve/nacionales/sistema-penitenciario-trabajara-privados-libertad-areas-social-y-politica/>  
 2011.1.16のインタビュー この記事に対して、Demetrio Ortegaという人物が「刑務所の問題が長く無視されてきたことは、嘆かわしいことだ。ベネズエラの刑務所だけではなく、南アメリカ大陸の状況として、ラディカルな問題解決の方法を研究すべきである。食事、睡眠の場所、攻撃されない安全、夫婦の関係、娯楽、図書館や学習の施設、技術者、宗教等。Varelaはチャベスや政府関係者と一緒に、長年の刑務所の悪弊、内部のマフィアなどを根絶できれば、偉大な未来が将来するだろう。」とコメントしている。INCESは、様々な領域の技術指導をする機関。  
<http://www.inces.gob.ve/>
- 62) Nuevo Modelo de Prisiones  
<http://fonep.gob.ve/institucion.php?ids=14>
- 63) Arranca plan "Panita" promueve inclusión laboral de la población pospenitenciaria  
<http://fonep.gob.ve/noticias.php?id=662>
- 64) Prensa presidencial/Juan Carlos Pérez 2008.7.12
- 65) inaugurada comunidad penitenciaria de coro  
<http://www.skyscrapercity.com/showthread.php?t=546459&page=2>
- 66) 日本弁護士連合会「死刑制度問題に関する通減」2002.11.22 <http://www.moj.go.jp/content/000055365.pdf>
- 67) Sistema penitenciario no es una "comiquita" sino una realidad con logros evidentes  
<http://www.correodelorinoco.gob.ve/poder-popular/sistema-penitenciario-no-es-una-%e2%80%9ccomiquita%e2%80%9d-sino-una-realidad-logros-evidentes/>
- 68) Humanización de las cárceles sólo es posible acabando con las mafias internas  
 Blanca Eekhout 2011.6.21の発言  
<http://www.correodelorinoco.gob.ve/nacionales/blanca-eekhout-humanizacion-carceles-solo-es-posible-acabando-mafias-internas/>
- 69) <http://www.worldbank.org/en/country/venezuela>
- 70) inaugurada comunidad penitenciaria de coro
- 71) Gobierno aprueba 605 millones para Sistema Penitenciario Nacional 2010.8.18

- <http://www.correodelorinoco.gob.ve/judiciales-seguridad/gobierno-aprueba-605-millones-para-sistema-penitenciario-nacional/>
- 72) Presidente Chávez aprobó Bs. 139 millones adicionales para centros penales 2011.9.24  
<http://www.correodelorinoco.gob.ve/nacionales/>
- 73) ibid
- 74) Red de Orquestas Sinfónicas Penitenciarias venezolana, pionera en el mundo  
<http://www.magazine.com.ve/red-de-orquestas-sinfonicas-penitenciarias-venezolana-pionera-en-el-mundo/>
- 75) それは主に政治家を説得するために必要な時間だった。Venezuela: Barinas, Oct. 27  
<http://nathanschramnoise.com/2013/11/venezuela-barinas-nov-27th/>
- 76) 2007年は実は、ベネズエラの刑務所で498人が殺害されているとNGOによって指摘された。Llega a la cárcel “el efecto multiplicador” del sistema de orquestas de Venezuela La Jornada 2008.6.11  
<http://www.jornada.unam.mx/2008/06/11/index.php?section=cultura&article=a04n1cul>
- 77) Red de Orquestas y Coros Penitenciarios  
<http://fundamusical.org.ve/actividades-artisticas/agrupaciones-actividades-artisticas/orquestas/orquestas-sinfonicas-penitenciarias/#.U9zKWcscSck>
- 78) <http://fundamusical.org.ve/actividades-artisticas/agrupaciones-actividades-artisticas/orquestas/orquestas-sinfonicas-penitenciarias/#.U9zKWcscSck>
- 79) モラの説明は他の参照がない限り<http://encontrarte.aporrea.org/132/entrevista/>
- 80) 茂木大輔『オーケストラ楽器別人間学』新潮社
- 81) 同様の指摘は、Cuando se le entrega un instrumento musical a un reo surge la riqueza espiritual y comienza la regeneracion  
<http://www.noticias24.com/venezuela/noticia/93775/cuando-se-le-entrega-un-instrumento-musical-a-un-reo-surge-la-riqueza-espiritual-y-comienza-la-regeneracion/>
- 82) モラの説明は同様に<http://encontrarte.aporrea.org/132/entrevista/>
- 83) エル・システマの指導者であるエドアルド・メンデスは、施設における訓練と仕事は、囚人たちの教育のための基礎的な点であると説明している。彼は、少年たちに使われているのと同じ技術を、囚人のためにも教えているといっている。  
Cuando se le entrega un instrumento musical a un reo surge la riqueza espiritual y comienza la regeneracion  
<http://www.noticias24.com/venezuela/noticia/93775/cuando-se-le-entrega-un-instrumento-musical-a-un-reo-surge-la-riqueza-espiritual-y-comienza-la-regeneracion/>
- 84) <http://nathanschramnoise.com/2013/11/venezuela-barinas-nov-27th/>
- 85) 武器としては、弦楽器の弦が首を締める手段になることが考えられている。練習時間が毎日8時間の場合はこれで問題ないが、時間が少ないときには、部屋にもどっても練習したがる者もいる。
- 86) Llega a la cárcel “el efecto multiplicador” del sistema de orquestas de Venezuela  
<http://www.jornada.unam.mx/2008/06/11/index.php?section=cultura&article=a04n1cu>
- 87) Simon Romero ‘Amid Despair in a Venezuelan Prison, Strains of Hope From a Music Program’ The New York Times June 23, 2008
- 88) ibid
- 89) ibid オーケストラに参加して、態度の改善が顕著だと、刑期が短縮されるメリットがある。
- 90) <http://www.bbc.com/news/world-latin-america-14050825>
- 91) Venezuela prison orchestra gives hope to inmates  
BBC 2011.8.7
- 92) ‘Llega a la cárcel “el efecto multiplicador” del sistema de orquestas de Venezuela’  
<http://www.jornada.unam.mx/2008/06/11/>

- index.php?section=cultura&article=a04n1cul
- 93) Red de Orquestas y Coros Penitenciarios  
<http://fundamusical.org.ve/actividades-artisticas/agrupaciones-actividades-artisticas/orquestas/orquestas-sinfonicas-penitenciarias/#.U9zKWscSck>
- 94) Venezuela: Barinas, Oct. 27
- 95) ibid
- 96) Llega a la cárcel “el efecto multiplicador” del sistema de orquestas de Venezuela  
<http://www.jornada.unam.mx/2008/06/11/index.php?section=cultura&article=a04n1cul>
- 97) <http://encontrarte.aporrea.org/132/entrevista/>
- 98) 写真と本文Privados de libertad muestran su arte en la plaza Pueblos y Saberes de Caracas  
[http://www.correodelorinoco.gob.ve/comunicacion-cultura/privados-libertad-](http://www.correodelorinoco.gob.ve/comunicacion-cultura/privados-libertad-muestran-su-arte-plaza-pueblos-y-saberes-caracas/)
- [muestran-su-arte-plaza-pueblos-y-saberes-caracas/](http://www.correodelorinoco.gob.ve/comunicacion-cultura/privados-libertad-muestran-su-arte-plaza-pueblos-y-saberes-caracas/)
- 99) Llega a la cárcel “el efecto multiplicador” del sistema de orquestas de Venezuela
- 100) La orquesta los sacó del barrio 5. AMÉRICA, Venezuela/31/01/2013  
<http://gigantesdelaeducacion.com/la-orquesta-los-saco-del-barrio/>
- 101) Privados de libertad muestran su arte en la plaza Pueblos y Saberes de Caracas  
<http://www.correodelorinoco.gob.ve/comunicacion-cultura/privados-libertad-muestran-su-arte-plaza-pueblos-y-saberes-caracas/>
- 102) <http://encontrarte.aporrea.org/132/entrevista/>
- 103) ibid